旧約物語テキストにおけるヒンネー（見よ）の機能

勝村弘也

一、はじめに

ヘブル語のヒンネー（hinnēh）およびヴェヒンネー（wᵉhinnēh）――ヒンネーに接続詞のヴェが結合したもの――の用法と機能については、既に拙論「新しい現実」において相当詳しく論じたのであるが、[1] ここで再考するには当然それなりの理由がある。まず、「新しい現実」の場合、表題が示すようにヒンネーの用法と機能を客観的実証的に分類整理するよりも、どちらかと言えばそれを「神学的」次元に属する問題と関連づけて考察するという点に眼目があった。ここではこの語の用法をテキスト学的視点から出来るだけ体系的網羅的に叙述するよう心がけた。つぎに、先の拙論ではヒンネーに関する旧約学関係の諸文献にはあまり関心を払わなかったのであったが――当時W・シュナイダーの文法書[2]以外に目ぼしい文献を見出せなかったことにもよる――、その後、A・バーリンの物語テキスト（特にルツ記）におけるヒンネーの機能を考察するという筆者の関心とよく合致する研究が現われたこともあって、今回はこのような文献にも十分な注意を向けた。[3]

旧約中のヒンネーの用例は、マンデルケルンのコンコルダンスによれば一〇五七回もある。[4] どの書にもまんべんな

く出現するようにも見えるが、ヒンネーとヴェヒンネー等に分けて観察すると多少の違いが見られる。まず詩篇とヨブ記にはヒンネーが相当数用いられているのに(詩篇二六回、ヨブ記一三回)、ヴェヒンネーとなると詩篇一回、ヨブ記二回と極少数になる。物語テキストや預言書にはどちらの形態もかなり用例が多いようにも見える。しかしながらエレミヤ書で見るとヒンネー五五回、ヴェヒンネー一二回と片寄りがあるばかりか、ヒンネーという一人称接尾辞(suffix)のついた形が実に六二回(その他九回、計一三八回)も出現する。エゼキエル書の場合、それぞれ二六回、四八回、三五回となる。さらにこの両預言書におけるヴェヒンネーの用例を検討すると、幻視に関係するものが圧倒的に多いことがわかる(エレミヤ書六回、エゼキエル書三四回)。

先の拙論では、「ヒンネーが多く会話的あるいは言述的なテキストにあらわれるのに対し、ヴェヒンネーは物語テキストに多く現われる」として、ヒンネーとヴェヒンネーの用法を別々に考える根拠とした。[5] 今回は次のように考えて正確を期すことにする。ヒンネーは物語の中では専ら会話部分に出現するが、預言書や詩篇にも頻出する。それに対しヴェヒンネーは、物語テキストの語り (narration) の部分に多く用いられているが、会話部分にも出現する。預言書では幻視(エレミヤ書四・二三―二六、エゼキエル書八章、四〇章、アモス書七章、ゼカリヤ書二章、五章等)等の視覚に関係した部分に用例が集中している。詩篇等の詩文テキストにはほとんど用いられない(詩篇は三七・三六のみ、箴言二回〔ヒンネーも一・二三のみ〕、ヨブ記では、一・一九の語りの部分以外に三二・一二の用例のみ)。そこで物語テキストにおけるヒンネーの機能を調べるに際しては、次の様に大別しておくこととする。

1、ヒンネーの用法と機能。この中に接尾辞のついた形も含める。

2、語りの部分におけるヴェヒンネーの用法と機能。夢・幻の報告文における用例もこの中に含める。

3、会話部分におけるヴェヒンネーの用法と機能。

伝統的な文法書においては、ヒンネーは普通「統辞論 (Syntax)」の部分で扱われる。『ゲセニウス・カウチ文法』[6]で関連事項をさがすと、「統辞論」中には第一四七節「不完全文 (Unvollständige Sätze)」のbにしか記述を見出せない。その他には、分詞の用法を考察した部分に(第一一六節u)若干の注目すべき記述が見出されうる。R・マイヤーの文法書では第一〇四節「分詞」及び第一二二節「条件文」にしかヒンネーの用法を考察した記述は見出されない。[7]他の文法書でも事情はあまり変らないが、例外は存在する。F・E・ケーニヒの記念すべき大著、Historisch-kritisches Lehrgebäude der hebräischen Sprache の第三巻第二部「統辞論」(一八九七年)には、相当の箇所にこの語の用法に関する緻密な考察がみられる。[8]これはケーニヒの文体論への強い関心から来たものであろう。様式史研究以前、九〇年も前の著作ではあるが、他の古典的文法書よりもはるかに有用である。

様式史研究は、約五〇年以前から預言者の審判および救済の告知におけるヒンネーやヒネニーの機能を調べてきた。これらの語ではじまる定型 (Formel) が、預言の導入部となって、歴史への神の予期せざる驚くべき介入が告知されるのである。[9]このことと並んで、預言者による幻視の報告や物語テキスト中の夢の描写におけるヴェヒンネーの機能も様式史が明らかにしてきた。[10]夢の描写については、本論考でも取り上げることにする。物語テキストにおけるこの語の機能の重要性には、聖書の文芸学的研究が盛んとなった近年になって多くの研究者が注目するようになったが、筆者の知る限り新しい言語観やテキスト理論に立脚した体系的研究は未だあらわれていない。[11]このような事情から、先の拙論「新しい現実」の場合と同様、ここでもヒンネーおよびヴェヒンネーを「マクロ統辞記号」として考察して

いるW・シュナイダーの試みが、われわれの考察の出発点となる。

マクロ統辞記号とは、シュナイダーによれば「話しことばにおいて、テキストの大区分（Großgliederung）を標付けるために用いられる語、小辞（Partikel）および用法」のことであり、「話し手は、話の開始、推移、クライマックスおよび終結に対する注意を聴き手に喚起するため、このようなマクロ統辞記号を（話の中に）挿入する」[12]。シュナイダーは、このようなマクロ統辞記号として、ヒンネーやヴェヒンネーの他に、ヘーン（hēn）、ヴェアッター（wᵉ'attāh）ワイヒー（wajhī）等を挙げ、これらの語の用法をそれぞれ簡単に説明している。これらの語の統辞記号としての機能は、当然のことながら「文」のレベルを越えてテキスト全体に及ぶわけであるから、文を考察の最大単位とする旧来の文法の立場からは十分な解明が不可能となる。この点からみれば、伝統的文法の枠内でヴェヒンネーの用法を分類しているD・J・マッカーシーの論文[13]は、多数の用例を観察しているにもかかわらず――それ故拙論にとっても一つのたたき台にはなるが――極めて不十分なものと言わざるをえない。

もちろんマッカーシーが、この語の「情緒的含蓄」に注目している点は正しい。KBLは、ヒンネー（及びヴェヒンネー）を「大多数は中断して注意を喚起するもの（meist unterbrechender Aufmerksamkeitserreger）」と呼んでいる[14]。確かにヒンネーには、間投詞、感嘆詞としての情動的機能があるのだが、この機能は次のような問いのもとで観察される必要がある。「だれが、だれの、どのような感情を刺激もしくは喚起するのか」。また、「そこではどのような意味の中断が起こっているのか」。このような問いに答えるためには、ヒンネーやヴェヒンネーが使用されているコミュニケーションの状況ないし場面全体が解明されねばならない。この統辞記号が物語テキストの中の会話部分に出現する場合には、前後の文脈から比較的容易に発話の状況を推測することが出来る。このような場合には、普通、

話し手と聴き手が明確にテキスト中に出現するからである。しかし、語りの部分で使用されている場合には、解明されるべき事態はテキスト内的な（textintern）諸関係にのみ求められるべきではなく、物語テキストの背後に立っている物語の語り手や予想される物語の聴き手ないし享受者（この中には当然「われわれ」も含まれる）といったいわばテキスト外的（textextern）要因がどうしても考察の視野の中に入ってくる必要が生じる。このような関連において、マクロ統辞記号としてのヒンネーおよびヴェヒンネーの機能は、実用論的（pragmatisch）な観点――記号と記号の使用者の関係を問題とする――から考察される時、最もよく理解されるであろう。次節においては、まず会話部分での用例が圧倒的に多いヒンネーの用法を検討してみよう。

二、ヒンネー

会話中で使用されているヒンネーには、指示的機能――聴き手に既知あるいは未知のものや事柄を指し示す――が顕著である。ヒンネーに名詞や名詞文の続く用例はかなり多い。例えばヒンネーは創世記全体で四六回使用されているが、名詞文が続く用例は二五ある（そのうち一〇例では動詞の分詞形が使われている。ただし、三七・一九、四八・二は完了形とも取れる）。

〈例文1〉[15] 彼らは彼に言った。「あなたの妻サラはどこですか」。彼は言った、「ヒンネー、テントの中です」。（創世記一八・九）

三人の客人がアブラハムを訪問する。彼らをアブラハムは歓待することになるが、大木の下での食事のときに彼らはサラに関するニュースを伝達しようとする。「サラはどこか」と聞いたのはそのためである。アブラハムは「サラ

は(あるいは、彼女は)テントの中」と答えず、「ヒンネー、テントの中」と返事している。ここで何について語られているのかは、聴き手に既に知られている。アブラハムの妻サラである。テキストを『テーマ・レーマ構造』としてとらえる見方に立つと、[16] この際「サラ」が既知の情報、つまりテーマ(Thema)であって、このテーマにつけ加わることになる新しい情報、つまりレーマ(Rhema)は「テントの中」である。ヒンネーは、テーマの省略に係わると同時に、レーマを際立たせ強調する。

〈例文2〉 彼は兄弟たちに言った、「おれの銀がかえしてある。しかも、見ろ、おれの袋の中に」。(創世記四二・二八a)

この用例でもテーマが繰り返されず、レーマだけがヒンネーに続いている。銀を発見した話し手の驚きが、このような簡潔な文体を通して表現されている。なおここでは、ヒンネーはヴェガム(w°gam「しかも」)の後に来ているが、このような例は他にもある(ヴェガムの後、創世記三八・二四、〔四二・二二〕、出エジプト記四・一四、ガムの後、創世記三二・二一、エステル記七・九)。

〈例文3〉 「なぜおまえは『彼女はわたしの妹なんです』と言ったのか。〔それで〕わたしは彼女を自分の妻にしたのだ。さあ(ヴェアッター)、ヒンネー、おまえの妻。連れて出て行け」。(創世記一二・一九)

ファラオは、サライがアブラムの妻であることを発見した。怒り心頭に達したファラオは一気に相手の言動に関する三つの疑問文(一八節に二つの疑問文がある)を役げつける。つづいて相手の言動に起因する自分の行動を簡潔に述べる。「ヴェアッター、ヒンネー」は、このかなり長い話(discourse)に転換をもたらす。[17] ヒンネーには、名詞「お

まえの妻」がついて名詞文を形成している。ここでサライについて言表が行なわれていることは、会話の双方の当事者にも、物語の聴き手(ないし読者)にも明白である。決定的なのは、サライがアブラムの妻に他ならないという事実である。この事実をファラオは「ヒンネー、おまえの妻」と言い表わす。物語の聴き手は、ここで「ヒンネー」の指示的機能から、今話題の人物サライが実はファラオとアブラムの眼の前にいるのだという印象をうける。――この転換点以前ではサライは「彼女」と呼ばれていた――。サライがアブラムの妻であるという事実は、言うまでもなく話の聴き手アブラムには、既知であって新情報なのではない。それは彼がファラオに対して秘密にしていた事実であった。だが今や事態は明るみに出、アブラムには抗弁の余地が残されていない。この用例では「センネー+名詞」は、話し手が聴き手に決定的事実をつきつけるために用いられているといえる。そしてこの事実の確認――「確認」については後で考察する――に基づいて話し手は最終的命令を聴き手に下すのである。

〈例文4〉　アブラハムは燔祭のたき木をとり、彼の息子イツハクの上に置き、彼の手に火と刃物をとった。そして彼ら二人はいっしょに行った。イツハクは彼の父アブラハムに言った。彼は言った。「父よ」。彼は言った。「ここだよ(hinnenni)、息子よ」。彼は言った。「ヒンネー、火とたき木。でも、燔祭用の小羊はどこですか」。アブラハムは言った。「神が燔祭用の小羊をみずから備えられるだろう、息子よ」。そして彼ら二人はいっしょに行った。(創世記二二・六―八)

このアケダーの物語において、イツハクはこの場面ではじめて口を開く。父と子は押し黙ったままで二人いっしょに進んで行ったのであった。両者の間に対話はなかった。この時、息子イツハクが父アブラハムに呼びかける。父は、

ヒンネンニーと答える。このような一人称接尾辞のついた形は(ふつうは、ヒンネーニー)、呼びかけに対する応答語としてよく用いられている(創世記二二・一、一一、二七・一、一八、三一・一一、出エジプト記三・四、サムエル記上三・四、五、六、八、一六等)。この応答語によって両者の間に対語的状況が生れる。このようなヒンネーニーやヒンネンニーは、単なる指示的機能のほかに、新しい現実を切り開く機能を持っているといえる。次にイツハクの話の先頭に立っているヒンネーについて考えてみよう。ここではヒンネーには直接「火とたき木」という二つの名詞がついて、疑問文がそれに続いている。イツハクは、話し手と聴き手の双方に既知の物体——物語の聴き手にも既知——「火とたき木」に父アブラハムの注意を喚起する。こうして燔祭に必要な火とたき木が実際に存在している事実に対する父の同意を求めるのである。——ここで「刃物」への言及はないが、この危険な物体を語り手がわざと隠蔽しているのだと見ることも可能である——。しかし、この確認は、当然の論理的帰結として、燔祭にとって最も重要なものが欠けている事実をも暗示する。かくして「小羊はどこか」という決定的な問いが発せられることになる。父の答えは、あいまいにして多義的であるが、これは「備えられるだろう」と訳した動詞の用法と関係している。[18] 二人の対話はやみ、再び沈黙がおとずれる。「そして彼ら二人はいっしょに行った」。ここでのヒンネーは、疑問文に先行する事実の確認のために使用されていると言える。

〈例文5〉　彼女のしゅうとめノオミは彼女に言った、「むすめよ、あなたがしあわせになるように、わたしはあなたの落ち着き所を探すべきではありませんか。ところで(wᵉattāh) ボアズはわたしたちの親戚で、あなたは彼の雇った女たちといっしょだったじゃありませんか。ヒンネー、彼は今夜、打穀場で大麦を吹き分けます。それであな

たは身を洗って油をぬり、打掛をまとって打穀場に下って行きなさい。……」。（ルツ記三・一―三a）

ノオミの話はまず聴き手のルツのことを問題にするが、すぐにヴェアッターがボアズに関する別の疑問文を導入する。話題がここでルツからボアズへと転換するのである。二つの疑問文はともに相手への確認という性格を持っている。第二の疑問文は、ボアズこそ彼女たちの探し求めている（そして物語の聴き手も期待をかけている）まさにその人なのだということを強調している。この文の後に、分詞形を含む名詞文がヒンネーを先頭にして出てくる。ここでは、話題の人物が今夜打穀場に登場するのだという極めて重要な新情報が、ヒンネーによって導入されている。ノオミは、このホットニュースを嫁に説得的な仕方で伝達する必要があったのだ。新情報の伝達につづいて、ルツの取るべき具体的な方策が次に示されることになる。

〈例文6〉　三月ほどたって、イェフダーにつぎのように告げられた（wajjuggad）、「あなたの嫁、タマルは姦淫しました。しかもヒンネー、姦淫によって妊娠しています」。イェフダーは言った、「彼女を引き出して焼いてしまえ」。（創世記三八・二四）

突然、イェフダーには思いもかけなかった極めて重大な情報が伝達される。報告の二番目の文が、ヴェガム・ヒンネーで導入される（↓例文2）。このような表現によって、まさしく姦淫の動かぬ証拠が聴き手に呈示されることになるのだと、この報告者は考えたわけである[19]、――しかしもちろん、物語の聴き手は真相を知っているのだが――。この衝撃的報告は、ただちに聴き手の激烈な反応を引き起こしている。ヒンネーが新情報を導入する話の前には、この例のように情報の伝達を表わす動詞　wajjuggad　が来ていることがある（創世記二二・二〇、三八・一三、四八・二等）。

〈例文7〉　「イシマエルについては、おまえ〔の願い〕をわたしは聴いた。
見よ、わたしは彼を祝福し、彼を豊かにし、
彼を増し加える、とてもとても。
十二人の君たちを彼は生む、わたしは彼を大いなる民としよう。（創世記一七・二〇）。

アブラハムの子らに対する神の約束のことばの一部である。一九節以下の神の語りかけ全体が、詩的な（poetisch）文体をとっている。二〇節の原文をよく観察すると、まず人名イシマエルと動詞「聴く（√šm'）」の語呂合せがある。これはイシマエル伝説にとって本質的に重要な要素である（創世記一六・一一、二一・一七参照）。次にヒンネーが来て、素朴な美しさを持つリズミカルな神の祝詞（祝福の詞（ことば）Segenspruch）を導入する。前半部（二〇a）の語数律を見ると2＋2＋2＋2と四組のペアから構成されるが、後半部（二〇b）は3＋3になっている。[20] 祝詞ではなく、呪いの詞をヒンネーが導入している例としては、創世記二七・三九bがある。ここにもかなり明瞭な語数律が認められるようである。なおこの場合、詞を発しているのは神ではなく、その代理人としての族長イツハクである。このような用例は、ヒンネーがいわゆる「唱えられる詩文（rezitierte Dichtung）」[21] を導入するとまとめられよう。物語テキストにおいて神のことばをヒンネーが導入する例は多いが、必ずしも語数律が明瞭なわけではない。しかしそこに何らかの荘重な気分が存在するのは当然である。

〈例文8〉　神は言った、「ヒンネー、わたしはなんじらに与える、全地のおもてにあるすべての種を結ぶ草を、また木の実の中に種を結ぶすべての樹を。なんじらに食物とならん」。（創世記一・二九）

この場合、文が長いということが荘重な気分を醸し出すのに一役買っている。これは、二八節の「生めよ、ふえよ

……」というリズミカルな祝福の詞と一定の対照を示しているが、畳み掛けるような口調という点では共通性がある(意味的には「冗長」な文体)。例文7及び8ではヒンネーには動詞の完了形が接続しているが、これは神の言表を生き生きとしたものにしている(出エジプト記三一・六、士師記一・二)。このような完了形は、「遠近法的完了(perfectum perspectivum)」とか「詩的完了(poetisches Perfekt)」と名づけられている。[22] しかし、今取り上げている用例では、完了形は発話者の行動と結びついているから、「遂行的完了(performatives Perfekt)」――動詞の主語は「わたし」――とでも名づけた方がよいように思われる。なお、「ヒンネー+完了形」の前に「わたしは」がとび出している文も存在する(ʾanî 創世記一七・四、waʾanî 民数記三・一二、一八・六、八)。[23]

ところで「唱えられる詩文」ということですぐに思いつくのは預言である。実際、様式史研究が明らかにしたようにヒンネーは預言を導入する定型として広く用いられたのである。預言の導入に準ずる語法が物語の中の神のことばの場合にも多数認められる。

〈例文9〉 ヤハウェはシェムーエールに言った、「ヒンネー、わたしはこと(ダーバール)をイスラエルのうちに行なう。それを聴くものはみな両方の耳が鳴るであろう」。(サムエル記上三・一一)

ヒンネー以下の構文に注意すると、「ヒンネー+主語(わたし)+動詞の分詞形」となっているが、これは預言者的告知の定型と同じものである。将来の出来事に関する神の約束(確言)や預言は特に出エジプト記に於て同様の構文をとって繰り返し表現されている。

〈例文10〉 ヤハウェはこう言われる、「わたしがヤハウェであることを、これによっておまえは知るだろう。ヒンネー、わたしはわが手にある杖でナイル川の水を打つ(分詞)。するとそれは血に変るだろう」。(出エジプト記七・

一七)[24]

同じ構文はモーシェのことばにも認められるが(八・二五、協会訳二九節)、これはファラオに対して確言を与えているのだと解釈される。

〈例文11〉 彼女(=ノオミ)は言った、「ヒンネー、あなたの相嫁は自分の民と自分の神々のもとに帰っていきました。あなたも相嫁のあとについて帰りなさい」。(ルツ記一・一五)

シュナイダーは、ヒンネーが会話の冒頭に立って、開口の合図(Eröffnungssignal)としての機能を果す場合を考察している。[25] 例文11は、ノオミがルツを説得して故郷に帰らせようとしている所である。ノオミは、既に双方に知られている事実を確認する所から話を切り出している。ここでは開口の合図ヒンネーにつづいて、完了形をとる動詞文が来ている。このような構文が聴き手に事実の確認を求めている用例は他にも多いが、[26] 特に目立つのは、ヒンネー・ナー(hinnēh-nā')が開口の合図として使用されている場合である。

〈例文12〉 彼(=アブラム)がまさにエジプトに入ろうとして、そこに近づいたとき、その妻サライに言った。「あのなあ(ヒンネー・ナー)、わしは、おまえが美人の妻だと思うね」。(創世記一二・一一)

アブラムは妻のサライにエジプトでは自分の妹だとうそをつけと頼もうとしている。彼はこのサライにとっていやな提案を切り出す前に、彼女が美人であるという事実を承認させようとするのである。実に巧みな語りかけである。

〈例文13〉 さてイツハクが年老いて、目がかすんで見えなくなったとき、その長男、エサウを呼んで、彼に言った、「わが子よ」。彼は彼に言った、「はい、ここに(ヒンネーニー)」。彼は言った、「あのなあ(ヒンネー・ナー)、わしは

年をとって、いつ死ぬか分からない。[27] そこで(ヴェアッター)おまえの道具、おまえの箙とおまえの弓を持って、野に出かけ、野獣の肉をわしにとってきてくれ」。(創世記二七・一―三)

語り手は、まず年老いた父の状態を描写する。ヒンネーは「わたしは年老いた」という状態を表わす動詞の完了形を導入する。この事実は聴き手に既知であるが、語り手は「今ここで」相手の同意と承認を求めるのである。「年老いた」は「いつ死ぬか分からない」と結合して特別な重みを持つ表現となる。イツハクは死の床に伏しているのだ。彼は死ぬ前に愛する息子エサウを祝福しようと考える(四節)。そこで、祝福の儀式をとり行なうためにエサウを呼び、[28] そのための具体的な指示を与える必要があった。この用件は、ヴェアッターによって導入されている。ヒンネー・ナーで始まる文が相手に事実の確認を求め、ヴェアッター以下で具体的な指示が呈示されるという話の構造は、士師記のヤハウェの使いのことばにも見られる(士師記一三・三―四)。

ヒンネー・ナーは、創世記から列王紀下までに計二二回使用されているが、これらの用例を整理すると次のようになる。

(1) 創世記 一二・一一 ＋完了……勧誘命令 開口
(2) 一六・二 ＋完了 ＋勧誘命令 開口
(3) 一八・二七 ＋完了……疑問 開口
(4) 一八・三一 ＋完了……(疑問省略) 開口
(5) 一九・二 ＋名詞 ＋勧誘命令 開口 呼びかけ「わが主よ」
(6) 一九・八 ＋名詞文＋意向未完了・K 途中、'al-na' で開口
(7) 一九・一九 ＋完了……(8)につづく) 途中、'al-na' で開口

(8)		一九・二〇	＋名詞文…意向未完了・K	途中
(9)		二七・七	＋完了……勧誘命令	開口
(10)	士師記	一三・三	＋名詞文…勧誘命令	開口
(11)		一九・九	＋完了　＋勧誘命令	開口
(12)	サムエル記上	九・六	＋名詞文…勧誘未完了・K	開口　新情報（新人物の紹介）
(13)		一六・一五	＋分詞　＋勧誘未完了・J	開口
(14)	サムエル記下	一三・二四	＋分詞　＋勧誘未完了・J	開口　新情報
(15)		一四・二一	＋完了　＋ワウ命令	開口　新情報
(16)	列王紀上	二〇・三一	＋完了…意向未完了・K	開口　新情報
(17)		二二・一三	＋名詞文＋勧誘未完了・J	開口　新情報
(18)	列王紀下	二・一六	＋名詞文＋勧誘未完了・J	開口　新情報
(19)		二・一九	＋名詞文…（聴き手が命令を下す）	開口
(20)		四・九	＋完了……勧誘未完了・K	開口　新情報
(21)		五・一五	＋完了……勧誘命令	開口
(22)		六・一	＋名詞文…意向未完了・K	開口

この一覧表の第二欄には、ヒンネー・ナーで導入される文の性質が示されている。例えば「＋完了」は、完了形をとる動詞文に接続することを示す。このあと話者は聴き手に何らかの意志を表明することになるが、例えば「＋勧誘（願望）命令」の場合、直後に「どうか～して下さい」のような文が来るわけである。……は、この間にいくつかの節（clause）が入っていることを表わしている。Kは Kohortativ を、Jは Jussiv を示す。勧誘命令や意向ないし勧誘の未完了が、(12)を除いてすべて前接語の nā' を伴っていることは、注目に価する。ヒンネー・ナーは一部を除けば

確かに話わの冒頭に来ている（「開口」と表示）。ヒンネー・ナーは聴き手の同意、承認、了解を求めるなど何らかの意味で対話者双方が事実を確認するために使用される。確認さるべき事柄が、聴き手には新情報であると推定される場合は、これを表に示しておいた。(5)の用法は、他の用例と異なっているようにも見えるが、話者が相手よりも目下であることを確認しているのだとも解釈できる。

語りの部分にヒンネーがくる例は、非常に稀である。

＜例文14＞ それで、その井戸をラハイ・ローイーの井戸と呼ぶのである。ヒンネー、カデシとベレドの間。（創世記一六・一四）

＜例文15＞ それで、その所をマハネ・ダンと今日まで呼んでいる。ヒンネー、キルヤト・イェアリムのうしろ。（士師記一八・一二）

地名の原因譚（エティオロギー）的説明の後に、突然ヒンネーが来て物語の聴き手に問題の場所に関する一定の情報を提供している。もともと原因譚的モチーフというものは、物語的な虚構世界における出来事の進行を中断して、聴衆を「この世界」へと連れもどす働きをもっている。語り手が更に、聴衆に既知の地名を含む名詞文をヒンネーにつづけて導入するならば、語り手と聴き手の属する現実世界へのこの移行は強化されることになる。

三、語りにおけるヴェヒンネー

物語の語り（narration）の部分におけるヴェヒンネーの機能は、何らかの意味で物語の（自動的な）進行を中断し

て、新しい事態を出現させる点にある。つまりヴェヒンネーは物語の転換点に現われるのである。A・バーリンは、ルツ記におけるこの語の機能を、(1)視点の指標（an indicator of point of view）――登場人物がヴェヒンネーによって導入される節（clause）に含まれている事柄を知覚する――、(2)進行中の場面の中に新しい人物を導入する方法――「丁度その時（at that point）」と訳すとよい――の二つにまとめている。[29] そこでヴェヒンネーの出現するテキストを分析するに際しては、彼女の意見を参考にして、この語につづく節がどの登場人物の視点から物語られているのかを調べながら、そこでは物語のコンテキストの中でどのような意味の転換が起こっているのかを観察することにしよう。しかしまたこのテキストは物語の聴き手の期待との関連でも分析される必要があるだろう。

1、〈例文16〉　彼女(＝ルツ)は行って、〔畑に〕入り、刈り入れ人たちの後からその畑で落ち穂を拾った。ところが彼女は偶然にもエリメレクの一族であるボアズの所有する畑にきた。ヴェヒンネー、ボアズがベトレヘムからやってきた。彼は刈り入れ人たちに言った、「ヤハウェ、なんじらとともに」。……（ルツ記二・三―四）

ヴェヒンネーは、新しい登場人物を物語に導入する。この場合、語りが既にその場面に登場している者の視点から行なわれるのは当然であろう(この例文では畑にいる者の視点がとられる)。物語世界においては決定的な出会いがしばしば全く偶然に起こる。ルツは全く偶然にもボアズの畑に入り、まさに丁度その時にボアズが現われるのである。アビガイルとダビデの出会いも偶然に起こった。もっともアビガイルはダビデに会おうと出かけたのだったが。

〈例文17〉　彼女がろばに乗って山陰を下っていくと、ヴェヒンネー、ダビデとその従者たちが彼女の方に向かって下ってくる。それで彼女は彼らとはち合わせになった。（サムエル記上二五・二〇）

この例では分詞が巧みに使用されていて、生き生きとした表現になっている。「彼女が乗って」は wᵉhajāh＋分詞が使われており、ヴェヒンネーの後の「下ってくる」も分詞である。「はち合わせになった」と訳した語は ʿpgš のワウ未完了継続形で、「遭遇する」の意である。

〈例文18〉 彼がまだ語り終らないうちに、ヴェヒンネー、リブカーが出て来た。……(創世記二四・一五)

ここでもヴェヒンネーは分詞文を導入する。アブラハムのしもべの長い祈りによって、物語の緊張は徐々に高められる(一二―一四節)。聴衆はそのような娘がほんとうに泉のほとりに現われるかと期待をふくらます。丁度その時、一人の娘が出てくる。ヴェヒンネーが使用されているので聴衆への効果は大きなものとなろう。例文18と非常によく似た表現がサムエル記上一三・一〇にも見出される(どちらもワイヒー (wajhî) で文が始まっている)。

〈例文19〉 シャウルは言った、「燔祭と酬恩祭をおれの所に持ってこい」。こうして彼は燔祭を立ちのぼらせた。彼がその燔祭を立ちのぼらせ終ったその時、ヴェヒンネー、シュムエルが来た。シャウルは彼を出迎えて挨拶しようと出て行った。するとシュムエルは言った、「おまえは何をしでかしたのか」。(サムエル記上一三・九―一一a)

シャウルは祭儀上の定めを無視して祭司ではないのに燔祭を献げてしまう。シャウルにすれば、危機的状況の中で軍事的指導者としてまさに最善の政治的行動をとったのである。しかし、この行動は物語の聴衆に非常な緊張を引き起こさざるをえない。聖なる掟への違反が明らかだからである。シュムエルは何と言うだろうと思った丁度その時、聴衆にとっては或る意味で「期待されざる」人物シュムエルが登場する。ギリシャ悲劇の場合と同じく主人公の視点と物語の享受者の視点とがずれていることが大きな効果を生み出すのである。

「丁度その時」のモチーフは旧約の中で頻繁に出現する。[39] 数箇所ではこのモチーフが、オード (ʿôd)＋分詞＋ヴェ

ヒンネーの構文で表現されている(例文20・21)。

<例文20> 彼がまだ語っているうちに、ヴェヒンネー、祭司エブヤタルの子ヨナタンが来た。(列王紀上一・四二)

<例文21> 彼が彼らとまだ語っているうちに、ヴェヒンネー、王が彼の所に下ってくる。[31](列王紀下六・三三)

2、**<例文22>** 夜中になってその男はびっくりして起き返った。[32] ヴェヒンネー、女が彼の足もとに寝ている。(ルツ記三・八)

物語の登場人物が、予期しなかったものを発見する場合にヴェヒンネーが用いられる。例文22の場合、物語の聴き手はルツがボアズの足もとに伏していることを既に知っている(七節)。しかしボアズはそのことに全く気づかずに寝ていた。夜中に突然「その男」は「女が」寝ているのを発見する。この語りがボアズの視点からなされていることは、「ルツが」ではなくて「女が」と表現されている点に明らかである。[33] この例文では、ヴェヒンネーの直前に「見た」のような登場人物の知覚を明示する語が欠けているが、多くの場合は以下の例文のように wajjar'＋w°hinnēh の構文をとる。

<例文23> 彼(＝イツハク)がそこにいる日数が長びいているうち、ある時ペリシテ人の王アビメレクが窓から下をながめていて、発見した(wajjar')、ヴェヒンネー、イツハクが彼の妻リブカーといちゃついている。そこでアビメレクはイツハクを呼びつけて言った。「ほんとに('ak)ヒンネー、彼女はおまえの妻だ。どうしてまた『彼女はわたしの妹です』などと言ったのか」。(創世記二六・八―九a)

アビメレクはだまされていた。リブカーはイツハクの妹だと信じていたのだ。ところが全く偶然に事の真相を見て

しまったのである。例文22の「寝ている」と同様、ここでもヴェヒンネーにつづく節の動詞「いちゃついている(mᵉ-saḥeq)」――イツハクとの語呂合せ――は分詞形をとっている。九節にはアク・ヒンネーという語結合も観察される(確認の機能をもつ)。

<例文24> ヤアコブは出立して、東方の人々の地へと歩いて行った。すると彼は見た、ヴェヒンネー、野原に井戸。ヴェヒンネー(よく見よ)そこを、三つの羊の群がそのほとりに伏している(分詞)。その井戸からその群々に水を飲ませる(未完了)ためである。大きな石がその井戸の口の上にあった。(創世記二九・一―二)

語り手の視点は、遠方から井戸の方へと近づいていくヤアコブの視点と一致している。ヤアコブはまず野原の中に井戸を発見する。よく見ると三つの群がいる。この二つ目のヴェヒンネーは「そこ(śām)」とハイフンで連結されているから、「そこをよく見よ!」のような物語の聴き手への呼びかけの要素が存在するであろう。「水を飲ませる(jaśqû)」は kî で導入される節の中にあって説明の時制としての未完了(三人称・複数)をとっている。[34] この聴衆に対する説明的な語りは、ヤアコブの思考とも一致している。そう考えている間にヤアコブは井戸の所まで来た。そこで井戸の口をふさいでいる大きな石に気づくのである。文のリズムを観察すると、二節の冒頭――「すると」以下――以外はヤアコブの歩行のリズムに合わせるかの如くゆったりしているように思われる。

<例文25> 神の人の召使[35]が朝早く起きて出てみると、ヴェヒンネー、軍勢がその町を包囲している。そして馬と戦車! 彼の若者は彼に言った、「ああ、御主人様、ど、どうしましょう」。彼は言った、「恐れることはない。彼らといっしょにいる者より、われわれといっしょにいる者の方が多いのだ」。そしてエリシャは祈って言った、「ヤハウェよ、どうか彼の目を開いて下さい。彼が見えるように」。ヤハウェがその若者の眼を開かれたので、彼は見た。ヴェ

ヒンネー、火の馬と戦車が山に満ちている、エリシャのまわりに。（列王紀下六・一五―一七）

このテキストにはヴェヒンネーが二度現われる。召使は予想もしなかったのに、大軍勢を発見して仰天する。戦車隊までいるのだ。原文を見ると、彼の狼狽ぶりは音象徴によっても示されている。ʾahāh ʾadonî ʿēkah naʿaśeh とア音の連続する疑問文である。彼には決定的な救助が神から来るという可能性を見ることができないのだ。神の人エリシャは超自然的な神の力がシリアの戦車隊に勝ることを確信している。若者にはわれわれの肉眼では見ることの出来ない超自然的なものを見る眼力が必要なのである。エリシャの祈りによって若者の眼は突然開かれる。彼は前に見たのとは別の現実を発見するのである。この場面の語りは、エリシャの視点からではなく、彼の召使（＝若者）の視点から物語られていることに注意する必要がある。決定的な転換が二つ目のヴェヒンネーで起こるのは言うまでもない。なお、神によって眼が開かれて以前には見えなかったものが見えるというモチーフは、このテキストの直後にもあるが（二〇節）、創世記二一・一九、民数記二二・三一（眼の覆をとる ʿ glh）にも見出せる（創世記三・七、出エジプト記四・一一、ルカによる福音書二四・三一、ヨハネによる福音書九章、一六・八、使徒行伝九・一八等をも参照）。

登場人物が何かを発見して大いに失望するというモチーフもかなりある。

〈例文26〉 朝になった、ヴェヒンネー（見よ）彼女を。レアだ。（創世記二九・二五）

〈例文27〉 レウベンがその溜池に戻ると、ヴェヒンネー、溜池の中にヨセフはいない。（創世記三七・二九）

〈例文28〉 ダビテと彼の部下たちがその町に入ると、ヴェヒンネー、それは火で焼き払われ、彼らの妻も息子も娘も連れ去られていた。（サムエル記上三〇・三）

以上の三例で見る限り、ヴェヒンネーで導入される情報は、物語の聴き手には既知のものである。

発見のモチーフは凝視と結びついて、「眼を挙げて見た」という表現をとることがよくあるが――wajissâ' 'ênâw wajjar' 等の構文――これにヴェヒンネーで導入される文が接続すると、聴き手への働きかけはより強力となる。このようなヴェヒンネーの用例は創世記からサムエル記下までに九例ある[36]（列王紀にはない）。例文を一つだけあげる。

〈例文29〉 アブラハムは彼の眼を挙げて見た、ヴェヒンネー、雄羊が一頭その角をやぶにひっかけている。（創世記二二・一三a）

この例文については「アブラハムは一頭の雄羊を見た」というような文と比較する形で先の拙論において相当詳しい分析を試みたので、ここでは論述を控える[37]。発見のモチーフと転回点（περιπέτεια）の関係についても紙面の関係もあるので再考は行なわない。

3、夢の描写におけるヴェヒンネーの用法については既にいくつかの研究が存在するのでここでは簡単にまとめておく[38]。

〈例文30〉 創世記二八・一一―一三

夢を見るまでの状況の描写

彼（＝ヤアコブ）はその場所に逢着した。日が暮れたのでそこで一夜を過ごした。彼はその場所の石をとってまくらとし、その場所に伏して寝た。

夢の告知

彼は夢を見た、

夢開始の合図

ヴェヒンネー

夢のシークェンス(1)

階段が地の方へと立てられており、その頂上は天の方へと到る。

夢の継続の合図

ヴェヒンネー

夢のシークェンス(2)

神の使いたちがそこを上ったり、下ったりしている。

夢の継続の合図

ヴェヒンネー

夢のシークェンス(3)

ヤハウェが彼の上に立っている。そして言われた、「わたしこそ、なんじの父アブラハムの神、イツハクの神、ヤハウェである。……」。

「夢を見る（ḥlm）」という動詞の直後にヴェヒンネーが来て、夢の開始が告げられる。第二、第三のヴェヒンネーは、夢が続いていることを表示している。この例文では、ヴェヒンネーの後の動詞は分詞形をとっている。ただし、シークェンス(3)の「そして言われた」はワウ未完了継続形であって、ここから一五節の終りまでかなり長い神の約束のことばが続く。夢の描写が物語テキスト中に現われると、劇中劇とか映画の中の映画のような事態が起こる。

夢の場面は、物語の内部の人物――創世記三七・六以下のヨセフによる夢の報告の場合は、報告の聴き手である兄たち――に描き出されるばかりでなく、物語の聴き手にもリアルなものとして表象されるのである。

4、夢の描写と非常によく似た情景描写が、語りの中で行なわれる場合がある。アブラムのヌミノーゼ体験を描き出した創世記一五章のヴェヒンネーの用法については先の拙論で既に論じたので、[39] ここでは別のテキストを取り上げてみよう。これも非常に議論の多いテキストである。

〈例文31〉 9彼はその場所でほら穴に入り、そこに宿った。ヴェヒンネー、ヤハウェのことばが彼に(臨んだ)。そして彼に言われた、「どうしたのかね、そこで、エリヤフよ」。10彼は言った、「わたしは万軍の神ヤハウェに熱心に尽くしてきました、……」。11彼は言われた、「出て、山の上でヤハウェの前に立ちなさい」。ヴェヒンネー、ヤハウェが通り過ぎる。大きな強い風が山々を引き裂き、岩々を打ちくだく、ヤハウェの前で。ヤハウェはその風の中にではない。その風のあとに地震、ヤハウェはその地震の中にでもない。12その地震のあとには火、ヤハウェはその火の中にでもない。そして火のあとに、静寂のしみ入る声 (qôl dᵉmāmāh daqqāh)。13エリヤフが聴いた時、その顔をマントに包み出て行き、ほら穴の入口に立った。ヴェヒンネー、彼に声が。そして言われた、「どうしたのかね、そこで、エリヤフよ」。14彼は言った、「わたしは万軍の神ヤハウェに熱心に尽くしてきました、……」。(列王紀上一九・九―一四)

訳語で問題になる箇所が相当あるが、若干の箇所のみについて注釈する。まず、一番目と三番目のヴェヒンネーの後の文はどちらも名詞文である。九節と一三節のヤハウェのことばにも動詞がない。一一節のヴェヒンネー以下では

分詞文が三つ連続する。その後の文はロー（lō）で否定される名詞文であって、例えば「非存在」を示す'ajin のような語はなく、「その風の中」や「その地震の中」が否定されているだけである。「しかし主は風の中におられなかった」というような訳は、訳しすぎである。コール・デマーマー・ダッカーについては、あまりにも問題が多いので説明を省略する。このテキストの一番の問題は、すでにヴェルハウゼンが気づいていたもので、一一節の「出なさい」という神の命令と一三節のエリヤフの行動「彼は出た」の間が空きすぎている点にある。次に問題なのは九節後半――一〇節と一三節後半――一四節が逐語的に重複していることである。[40] これらの問題をここで逐一ていねいに論じることは、紙面の関係から不可能であるが、一番目の問題はヴェヒンネーの解釈と関係するので多少述べておく。ヴェルハウゼンは次のように考えた。一一節前半の神の命令から読者はエリヤフがほら穴を出てヴェヒンネー以下の神顕現に接したのだと考えてしまうだろう。ところが一三節になってやっとエリヤフは「聴いて」――ここに目的語を示す語は欠如――「その顔をマントに包み」出てくるのだ。これだとコールはほら穴の中で聴かれたことになり一一節と矛盾する。ヴェルハウゼンの読み方を今われわれの用語で言いかえると、ヴェヒンネー以下の語りがエリヤフの視点から物語られていると判断したことになる。だがこれが唯一の正しい読み方であろうか。既に見たように、一般にヴェヒンネーは物語の転換点に立っている。つまり物語の自動的進行が中断されるのである。一一節をよく見るとヴェヒンネーの前に登場人物の何らかの知覚を表わす語はない――この点で創世記一五章のヴェヒンネーの用法と著しく類似する。特に一五・一七の「通過」に注意！――。ここでは、映画やテレビの場面転換のように、聴衆（＝読者）がヴェヒンネーによって突然ほら穴の中から外へと連れ出されるのだと考えられる。そのことによって当然エリヤフの視点と物語の聴き手の視点はずれるのだが、ずれてもかまわないのだ。否、このような物語の中断によって生ずる視点

のずれこそがこの神顕現の場面をドラマティックにしているのではなかろうか。一一節のヴァヒンネー以下の文の特異性もこの中断を効果的なものにしているように思われる。

ここで本来なら「会話部分におけるヴァヒンネー」について論じるべきであるが、紙面の関係もあるので別の機会にゆずりたい。だいたいここまでに述べたヒンネーの用法とヴァヒンネーの用法を重ね合わせたような結果になることのみを記しておく。

註

(1) 「新しい現実——『見よ』を手がかりとして——」『キリスト教論叢』15号(一九八一)一三一—一六一頁。

(2) W. Schneider, Grammatik des Biblischen Hebräisch (1978³) 261–268.

(3) A. Berlin, Poetics and Interpretation of Biblical Narrative (1983) 62f. 91–95.

(4) S. Mandelkern, Veteris Testamenti concordantiae hebraicae atque chaldaicae (1977) 335–339.

(5) (=註1)一一四頁。

(6) W. Gesenius-E. Kautzsch, Hebräische Grammatik (1909²⁸)

(7) R. Meyer, Hebräische Grammatik, Bd. III Satzlehre (1972³) § 104 Partizipium 2f; 3b § 122 Der Konditionalsatz 3a. b.

(8) F. Eduard König, Historisch-kritisches Lehrgebäude der hebräischen Sprache, Bd. III 2, 2 (1897; Nachdruck 1979) § 131; 237e-h; 325c; 341v; 357n; 361g; 374b; 390g-o; 410b; 415k.

(9) P. Humbert, Die Herausforderungsformel hineni ēlèka: ZAW 51 (1933) 101–108. –L. Alonso-Schökel, Nota estilística sobre la partícula hinnēh: Biblica 37 (1956) 74–80. –Kl. Koch, Was ist Formgeschichte (1964, 1974³) 259f. また、ヒンネーに関する様式史研究の成果を要約したものとしては、D. Vetter, Art. hinnē: ThHAT Bd. I (1975²) 505–507.

(10) W. Richter, Traum und Traumdeutung im AT. Ihre Form und Verwendung: BZ 7 (1963) 202–220. –B. O.

(18) 動詞「見る (√r'h)」のクトル未完了形で、「選ぶ」の意味もある。なお「見る」はこのテキスト全体の key word である。

(19) Andersen はここに話者の「驚きの表現」を見てとる。"seems to express astonishment at something quite sensational". (=註11), 96.

(20) 二〇bの前半にはs音の、後半にはg音のアリタレイション が認められる。

(21) Hermann Gunkel, Die israelitische Literatur (Leipzig 1925, Darmstadt 1963) 2f.

(22) Schneider (=註2), 206.

(23) 宣言的なテキストをヒンネーが導入する場合に、必ずしも完了形をとることは限らない。ヒンネーに名詞文がつづく例もある(出エジプト記二四・八)。

(24) 同じ構文をとる神のことばとしては、出エジプト記四・二三、七・二七(協会訳八・二)、一九・九、二三・二〇等。

(25) Schneider (=註2), 262.

(26) 創世記二七・六、三八・二三、四二・一、サムエル記上八・五、九・八、一二・一等。

(27) E. A. Speiser はヒンネー・ナーを As you see と訳す。ここの英語くの逐語訳は、I know not the day of my death. E. A. Speiser, Genesis (1964) 205, 208.

Long, Reports of Visions among the Prophets: JBL 95 (1976) 353-365.

(11) この語の機能の重要性に注目している物語研究としては、ベーリンの著の他に、R. Alter, The Art of Biblical Narrative (1981) 54; J. P. Fokkelman, Narrative Art in Genesis (1975) 50-51. この語の用法に関する注目すべき解説としては、F. I. Andersen, The Sentence in Biblical Hebrew (1974) 94-96.

(12) (=註2) 261.

(13) D. J. McCarthy, The Uses of w^{e}hinnēh in Biblical Hebrew: Biblica 61 (1980) 330-432.

(14) L. Koehler-W. Baumgartner, Lexicon in Veteris Testamenti Libros (1958) 238.

(15) 例文の訳出に際してはヒンネーやヴェヒンネー自体は訳さない。いわば black box に入れたままで考察するのである。

(16) E. Gülich/W. Raible, Linguistische Textmodelle: UTB 130 (1977) 61-89. ケラルト・ヴァインリヒ著、勝俣豊・他訳『言語とテクスト』紀伊国屋(一九八四)一五〇頁、またこの頁の脚注に記載されている諸文献を参照。

(17) ヴェアヴァー・ヒンネーの同様の用例、申命記二六・一〇、ヨシュア記一四・一〇、サムエル記上二四・一一等。

(28) Speiser (=註27) 212f. はこのテキストをフルリ人の法との関連で解釈する。臨終の床での父の宣言が息子の権利を保証する。ヴェスターマンもこの物語が古い祝福の儀式のようすを伝承していると考えている。Cl. Westermann, Genesis: BK I/2 (1981) 530ff.

(29) A. Berlin (=註3), 95.

(30) 出エジプト記一六・一〇、民数記一七・七(協会訳一六・四二)、二三・六、士師記一九・一六、サムエル記上一一・五、サムエル記下一八・三一、列王紀上一三・一、二五等。

(31) オードの用法については、Gesenius-Kautzsch (=註6) § 116u を参照。

(32) 稀語の √hrd の意味は、「横を向く」と推定されるが文脈からこのように訳される。W. Rudolph, Das Buch Ruth: KAT XVII/1 (1962) 55. 参照。

(33) Berlin (=註3) 92.

(34) このような未完了の用法については、Schneider (=註2), 187f.

(35) この訳語には問題があるが、協会訳やブーバー訳などの読みに従う。Bücher der Geschichte: Verdeutscht von Martin Buber (1979[7]) 444.

(36) 拙論(=註1)三三頁の一覧表を参照。

(37) 拙論(=註1)四〇頁以下。

(38) (=註10)。

(39) 拙論(=註1)二九—三〇頁。

(40) J. Wellhausen, Die Composition des Hexateuchs und der historischen Bücher des Alten Testaments (1899, 1963[4]) 280. このような問題については、飯謙「列王紀上19章の神顕現物語——その伝承と構造——」『基督教研究』第四四巻第二号(一九八二)一〇八頁以下を参照。